平成29年度　学校評価中間総括表　　伊丹市立北中学校

教育目標	夢を持ち意欲的に生きる生徒の育成　―　自分に自信を　学校に誇りを　―
重点目標	（1）授業改善を常時行い、「授業がわかりやすい」と答える生徒を増加させる。 （2）魅力ある学校づくりに努め、不登校生0をめざす。 （3）教育相談を充実させ、何でも言える関係づくりに努める。 （4）生徒が主体的かつ積極的に取り組める活動を計画・実施する。 （5）「報・連・相」の重要性を全職員が認識し、風通しの良い職場づくりを行う。

項目			重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価	生徒	保護者	職員
学力の向上	1	基礎・基本の徹底と授業改善	・基礎的基本的な知識・技能を習得する。 ・自学力の育成を図る。	・各教科でサクラノートの形式を利用する。 ・各教室の黒板にサクラタイムで行う内容を掲示する。	・サクラノートの作成を各教科で推奨し、その見本を2学期の学習発表会、3学期に掲示し、授業アンケートで4,3を選ぶ生徒数が70%以上を目指す。 ・生徒・保護者・職員向けの各アンケートにおいて、対象項目の回答を70%以上を目指す。	A	・教師がSAKURAタイムやSAKURAプロジェクトの内容について意識して動いた結果として、生徒の学習につながっていることが考えられる。	・すべての教師があてを明確にする。 ・めあてをもとにSAKURAタイムでの学習内容を明示する。 ・教師は、SAKURAタイムで何もしていない生徒への声かけなどSAKURAタイムですべきことを伝え、学習を促す。 ・上記の取り組みにより家庭学習を促す。	SAKURAプロジェクト、SAKURAノート、SAKURAタイムの重要性・認識度が高まってきている。 家庭学習の習慣化については成果を収めているので、さらに時間・質の向上に努めてほしい。	⑥⑲	⑥ ⑰	④ ⑩
	2		・授業研究を行い、指導方法の工夫改善をする。	・本時のめあての提示とふり返りを徹底することで、分かる楽しさのある授業作りに努める。 ・1人1回協同学習を取り入れた公開授業を行う。	・アンケートで「先生は教え方にいろいろと工夫している」と肯定的に回答する生徒を80%以上にする。 ・全ての教員が年1回以上の授業公開を行う。 ・「授業中、自分の質問や意見を出しやすい」と肯定的に回答する生徒を70%以上にする。	A	授業に際してめあてを提示する教師が増えたが、授業の最後に振り返りをすることについては課題が残っている。 目標として掲げた数値目標については全てクリアできており、教師側の工夫の自己評価とそれに対する生徒の反応も肯定的である。一方で「授業がわかりやすく楽しい」という項目については肯定的な意見が80%を下回っており、工夫が学業成績の向上につながっていないことが予想される。	・生徒アンケートで「授業がわかりやすく楽しい」を肯定的に回答する生徒を80%にするため、教科内でのベテラン教員から若手へのスキルの継承を促進し、工夫の仕方を考え直す。 ・本字の振り返りを行い、生徒の理解度を把握し、次の授業につなげる	80%達成まで今一歩のところ 若手教員への伝承を期待する。 求められている活用力（思考、判断、表現）の向上を期待する。	③⑤ ⑮⑲	⑬	⑤ ⑥ ⑦ ⑧
	3	思考力・判断力・表現力の育成	・言語活動の充実	・ブックトークやビブリオバトルで本の紹介を行い、読書に対する意欲を高める。 ・年度初めに図書室を利用した授業を行う。 ・コミュニケーショントレーニングやNIEの活用により、思考力、判断力、表現力の育成を図る。	・各クラスの読書量調査で月平均5冊以上にする。 ・貸出し冊数を年間5000冊以上にする。 ・適宜ふり返りを行う。	B	・コミュニケーション・トレーニングやNIEに毎週積極的に取り組んでいる。生徒アンケートでも、A,Bと回答した生徒が8割を超えているため、習慣付いていることがわかる。 ・朝読書のアンケート結果は昨年より向上し、全学年が6割以上A,Bと回答した。担任が学級に自分の本を置くなど工夫していることも向上の理由と考えられる。一方で読書量調査の月平均は約4冊と、目標達成には至っていない。 ・貸出冊数の掲示はできていないので、今後掲示し、周知徹底を図る。 ・給食の開始に伴い、図書室利用者は減少している。教師アンケートの結果でも、読書に取り組める雰囲気作りは去年度の8割越えに対し、8割を切ってしまうなど減少が見られた。職員間での図書室利用に対する周知徹底が必要である。 ・授業による利用については、今後の課題である。	・コミュニケーション・トレーニングやNIEについては、毎週の習慣化は図れているため、教科ごとの内容に関連性を持たせるなど、つながりや意味が生徒に見えるようにしていく。　・朝読書の向上については、図書室から貸し出している学級文庫の使用状況やラインナップの見直しを図り、より読みやすい環境を整える。 ・北館は図書室から遠いため、今年度よりPTAの力を借りて移動図書を始めた。一年生の間では浸透しつつあるため、さらに職員への周知と制度の確立を図る。 ・貸し出し目標冊数を図書室に掲示し、周知徹底を図る。　・各教科が授業で図書室を使えるよう、図書室使用予定表を作成し、周知する。	移動図書の継続で、貸し出しの効率アップをさせる。 また、本の内容PRやブックトークなどで底上げを図る。	④㉑	⑤	⑨
	4	特別支援教育の推進と充実	・支援体制を整える。 ・特別支援教育の内容を充実する。	・全学級、全教科において個別の指導計画に沿った支援ができる体制を整える。 ・特別支援教育についての研修の場をつくる。 ・個別の指導計画を作成し、教育的ニーズに応じた指導を行う。	・外部の相談機関と連携し、支援についての研修を行い、生徒のニーズに応じた支援をする。 ・支援学級担任、交流学級担任、教科担任の連携をより密に行い、情報交換の場をつくる。 ・生徒一人ひとりの個別の指導計画を充実させ、全職員が情報を共有する。	A	・外部の相談機関と連携したり研修を行うなど生徒のニーズに応じた支援を行うことができたと感じている教員が9割近くいる。その反面、数人の教員ができていないと感じているので、全教科で支援できる体制を更に強化する必要がある。	・学級に特別な支援を要する生徒がいないクラスもあるので、担任だけでなく全教員で支援する意味で、教科の支援策を更に取り入れていく。	今後も特別支援教育の取り組みを全校あげて推進してほしい。 多様な生徒達に対応できる支援を期待する。			㉑ ㉒ ㉓
	5	社会への対応力をはぐくむ教育の推進	・系統的な進路指導を行う。 1年　自己を見つめ、適性を知る。 2年　職業体験 3年　自己実現するための進路選択	・中学3年間を見据えた進路指導を行う。 1年　社会人としてのルールやマナーを学ばせる。 2年　トライやる・ウィークを通し、働くことの大切さを知り、将来の職業を見据えた進路について考えさせる。 3年　オープンハイスクールなどを利用して、本人の興味・関心や適性に基づいた進路選択をさせる。	・キャリア学習ノートやプリントを活用し，自分の将来について考えさせる時間を確保する。 ・進路に関する情報を適切な時期に提供する。	B	・キャリア学習ノートやプリントを活用し、自分の将来について考えさせる時間を確保することができた。 ・進路に関する情報を適切な時期に提供することができた。	・キャリア学習ノートをより効果的に活用するために使用する時期を再考する。 ・3年間を見通した進路指導を家庭と協力して行う。	成果につながるタイミングや手法に関しての見直しが必要である。 社会とのつながりの中で自分の夢や特性を活かせるよう系統だった指導が必要である。	⑪	⑭	⑯

豊かな心・健やかな体	6	問題行動への対応（生徒指導）	・組織的な生徒指導を行う。	・問題行動に対しては、教育活動全体を通して教師間での共通理解を図って対応する。 ・生徒指導部会と教育相談部会を開催し、SSW及びSCを交え共通理解を図る。 ・巡回での様子は確認用紙に記入し、担任及び全教師で共有する。 ・個別の教育相談や、アンケートによる情報収集を行い、未然に問題行動の防止に努める。	・毎週1回、生徒指導部会と教育相談部会を開催する。 ・問題行動に対しての「報・連・相」をチャート図に従って確実に行う。 ・収集した情報をもとに丁寧に対応する。	B	・SSWやSCと充分に共通理解した上で部会を持つことができず、報告だけに終始することが多かったので、事前に情報を共有できるよう準備を進めておく。	・個別の資料を準備し、会議等が始まるまでに個々の様子がわかる資料を用意する。 ・横とのつながりを密にし、職員間で連携をとるようにする。 ・SCやSSWと生徒の情報を共有し、ケース会議を定期的に行い、連絡を密にする。	共通認識に隔たりがあるのか? 危機意識の共有化が必要で、問題解決より未然防止に力を入れていく必要がある。	⑨	⑦	⑫ ㊳
	7	不登校への対応	・教育相談やQUを活用し、生徒理解をすすめる。 ・あらゆる教育活動を通して、不登校生徒数の減少を目指す。	・教育相談やQUの結果を教師間で共有し、個々の生徒に対し効果的な対応を行う。 ・学校教育活動の中で生徒の変化を見逃すことなく初期対応に努め、家庭との連携を強化する。 ・家庭環境を考慮し、関係機関、SC、SSWとの連携を図る。 ・朝の打ち合わせ時にも気になる生徒の情報を交換する。	・生徒アンケートの「先生は相談にのってくれる」の肯定的回答を全学年80%以上にする。 ・生徒アンケートの「学校で自分を大切にすることや他の人への思いやりについて教えてもらっている」の肯定的回答を全学年80%以上にする。 ・個々の生徒の登校日数、状況を前年度より改善させる。	A	・生徒アンケートの「先生は相談にのってくれる」「学校で自分を大切にすることや他の人への思いやりについて教えてもらっている」の回答が全学年85%～90%の肯定的な回答で達成することができた。教育相談等の取り組みや教師の心がけによるものだと考えられる。	・学年内で情報共有を徹底して行い、その情報を元に、つながりを大切にする。 ・外部の機関や関係機関との連携、SC、SSWとの連携を深めるとともに、生徒が自宅の外へ出られない状況とならぬよう、教師・保護者・生徒との関係作りを根気強く行い対応できるように努める。	不登校の原因が多様化してきている現状に合わせたきめ細かい対応が望まれる。 関係機関との連携を強化する。 引きこもりでなく、別室や時間差登校、放課後登校が増えているのは成果である。	⑦⑩	⑮	⑬ ⑭ ⑮ ㊲
	8	健康教育	・規則正しい生活習慣を身につけ、健康管理能力を育成する。	・欠席調査を適切に行うとともに学級指導や保健だより等で健康に関する意識を高める。 ・教職員間で共通理解を図るとともに必要に応じて保護者との連携も密に図る。 ・給食導入に際し、教職員全員が給食指導が初めての経験となるため、まずは、教職員が給食に関する研修をおこない、安全に給食が実施されるようシステムづくりを行う。	・欠席調査にて欠席理由が不明な生徒については、学年間で共通理解を図り、速やかに保護者に連絡して状況の把握を行う。 ・前保健委員会が担当していた石けん点検や、健康に関する啓発活動の役割を前運動委員会の仕事とともに新しく引き継ぐ保体委員会の活動内容および体制について、土台作りを行う。 ・新設された給食委員会の活動内容および体制について、土台作りを行う。 ・（給食導入初年度のため） 時間や配膳のルール、食事のマナーを守り、安全に給食を食べることができる。	B	・前年度の課題であった生徒アンケート（A＋B）は80%以上を達成することができたが、教職員アンケート（A＋B）の結果については教職員の意識の差が反映されているものと考えられる。健康教育はあらゆる場面で教職員全員が行うものであるという認識を確認する必要がある。 ・新設された保体委員会の活動内容については，給食導入により、昼休み中の活動が制限されるため試行錯誤の状況であるが、給食委員会の活動内容については、よいスタートをきることができた。 ・今年度は給食導入初年度であったため、全職員で立ち当番を行うなど教職員主体であったが、システムづくりを行い、運搬・配膳については大きな混乱等なく実施することができた。今後は細かな内容についても検討し、改善していく必要がある。　　・食物アレルギー対応については、今後さらなる体制づくりを行っていく必要がある。	・保体委員が主体となって健康に関する啓発活動を行っていくことができるよう保体委員会で具体的な取り組みについて検討を行う。 ・給食委員の活動が定着できるよう今後も給食委員会で検討を行う。 ・食物アレルギー対応について全職員でより共通理解を図り、事故のない体制づくりの強化を行う。 ・学校評価のアンケート項目内容について、給食・食育指導の内容も含めた文言に変更する必要がある。	食育への関心度や興味が湧く、PR活動を実施していく必要がある。 健康に関する教育は全職員で関わることが大切である。	⑭	⑪	⑲ ⑳
	9	安全教育	・安全指導の工夫改善をする。	・交通マナーとルールを守る意識を高めるための外部機関による啓発を年1回以上行う。 ・不定期に登下校の様子を確認するなどで、登下校指導を年30回以上実施し、通学路違反を未然に防ぐ。登下校の際は、教師が校門に立ち、安全指導を行う。	・交通マナーとルールを守る意識を高める。 ・生徒アンケート「学校で交通マナーを教えてもらっている。」のAまたはBの評価が　80%以上	A	・生徒アンケート「学校で交通マナーを教えてもらっている。」の項目で80%以上がA、Bである。不定期の見回りによって、自転車通学生徒の意識が高まった。	・不定期の見回りを続ける。標識や法律などについて理解させる機会を設ける。	自転車通学生以外も含め、定期的な交通指導を継続してほしい。 交通事故の増加に対応できるよう日常の継続した指導が必要がある。	⑬	⑩	⑱
	10		・安全・安心の場を創造する。	・朝礼や終礼、集会などでの注意喚起 ・災害に対する教育の充実(掲示物など) ・防災に対する教員の共通理解の確認	・各アンケートの項目でAまたはBの評価が80パーセント以上	B	・「学校で、自分を大切にすることや他人への思いやりについて教えてもらっている。」「学校で社会のきまりについて教えてもらっている。」の項目が去年度よりA,B評価のポイントが向上している。 ・「学校で地震や火事・不審者から自分を守る方法を教えてもらっている。」「学校では交通マナーや消火器などの安全な使い方など生徒の安全に関する適切な指導が行われたり、地震や火事、不審者から自分を守る方法の指導が行われている。」のA,B評価のポイントが下がっている。	・年2回の訓練を年3回にして不審者の対応の訓練を行う。 ・映像を見ての防災教育も行う。消火器という語句ではなく他の表現をする。	・防災意識の向上。 ・消火器の扱い方でなく、初期消火対策・通報等の活動力の強化を望む。 ・特に発生が予想される南海トラフの防災意識を向上させてほしい。	⑦⑧ ⑫	⑨ ⑩	⑰ ⑱
	11	豊かな心を育む教育の推進	・健全な心の育成をする。	・「ココロを育む授業」を行う。（2学期） 「冒険教育」（1年） 「リレーションを深める集団づくり」（2年） 「心の健康教育」（3年） を実施する。 ・道徳教育の充実	・生徒アンケート⑦⑰　80%以上 教職員アンケート㉚　80%以上 ・道徳の教科化に向けて教材解釈や授業の組み立て方について研修を行い、全教員でローテーション授業を行う。	A	・アンケート結果では、目標であった生徒・教師ともに80%を達成することができた。Aと回答する生徒が⑦⑰ともに増加し、C以下が減少した。 ・道徳教育は教科にむけて研修を行うことができ、ローテーション授業も実施することができた。	・教師アンケートは全体では80%を達成しているが、Aと回答した割合が低い。「成長段階を意識して」という部分で、教師側の意識付けをどのようにしていけば良いか考える必要がある。具体的な改善策を模索中である。	身近な事象を取り上げて、理解しやすい方法で進めていく。 （親子関係、家族、仲間等） 「心の教育」を意図的に仕掛けていくことは必要である。 道徳的実践力の向上も続けてほしい。	⑦⑯		㉚

開かれ信頼される学校 園	12	学校情報の発信	・学校（授業）公開をする。	・学校通信や学年通信で学校情報を配信する。 ・ホームページを定期的に更新する。 ・土曜授業、オープンスクールなど学校公開を積極的に行う。 ・サクラメールをより積極的に活用する。	・学校だより、学年通信などで生徒の活動時の写真や感想文などを毎月掲載する。 ・ホームページの閲覧者数の確認ができるよう定期的にカウンターを記録する。 ・毎学期授業参観またはオープンスクールを行う。	B	・学校だより、学年通信を適宜発行し、学校情報を発信した。 ・ホームページの更新を行ったが、日々の様子を公開することは少なかった。 ・毎学期、授業参観やオープンスクールで学校公開を行った。	・ホームページに「北中の一日」として、その日の写真と出来事をアップしていく。	1日ごとは無理が（負担が）あると思うので、ウイークリーで「今週の出来事」の発信がよいのでは。 学校の教育活動を更にオープンにしてほしい。		⑪ ⑭	㉛ ㉜ ㉝
	13	施設・設備の管理	・施設・設備の管理。 ・清掃活動の充実	・定期的に安全点検を行い、適切・迅速に修理・修繕をする（依頼する）。 ・各掃除場所で、必要な手順を把握し一人一役を徹底させる。 ・整美委員会で掃除道具の管理（補充）を行う。 ・壊れた掃除道具の修理。	・毎月安全点検を行う。 ・安全点検の結果をまとめ修理や修繕を実行または依頼する。 ・整美委員会で掃除道具の点検を行い、壊れている物を修理し、丁寧に扱うよう指導を徹底する。	B	・毎月安全点検を行うことができた。 ・修理・修繕は一部はできたが、すべてはできなかった。 ・掃除道具に関しては壊れている物を修理し丁寧に扱うように指導することができた。 ・アンケート結果では、生徒・保護者とも、清潔で活動しやすい環境が整っているという割合が増えた。	・早期の修繕実行・依頼をする。 ・可能なかぎり修繕を進める。 ・整美委員会で掃除道具の修理をする環境を作っていく。 ・古いものを安全に大切に使う意識を、教師と生徒が持ち続ける。	校内だけでの対応には限界があると思うので、OBや地域の方の力を借りる。 設備の老朽化が目立つが清掃で美しい環境が構築されている。	⑰⑱	⑨	㉟ ㊱

学校関係者評価総括

年度当初に揚げられたテーマについては、ほぼ達成された様子である。昨年よりA評価を増やせていることは喜ばしい。不登校も減少し、また学校復帰に向けて取り組みも成果を上げている。
Bランクの「いまひとつ」の反省点をもう少し掘り下げ、具体化した取り組みが必要である。若手教員の増加については、OJT等日々の研修が必要である。
学校内だけで解決しにくいテーマについては、地域を巻き込んだ対策が必要である。

次年度に向けた重点的な改善点
・学力向上に向け、アクティブラーニングなど指導法の改善。
・きめ細やかな「心の教育」と教育相談の継続。
・教員間の意識（問題点に対する温度）の差の縮小。
・若手教員育成。

自己評価の基準　**A**：目標を上回った　**B**：目標どおりに達成できた　**C**：目標をやや下回った　**D**：目標を大きく下回った